

「キャプテンは、あやみ」

昨年の夏、新チームになったときに顧問から発表された。私にチームがまとめられるのだろうか、という思いもあったが、みんなからの推薦でもあったと聞き、頑張ろうという思いに変わった。小学校から同じクラブチームで練習に励んだ友達もいる。この仲間ではなくさん勝ち上がりたい、と心から思った。最後の夏の大会は、チームとして、そして、キャプテンとしての私の集大成だ。

その日が来るのを、私はずっと楽しみにしていた。仲間と一緒にコートで戦って喜びを分かち合いたい。そう思っていた。チームの練習の雰囲気からも、全力で向かっていくぞ、という気迫が感じられた。

しかし、その気持ちは突然奪われた。

大会3日前。実戦形式のディフェンスの練習中。相手の動きを止めようと、足を小刻みに動かす。

「コキッ……」

ひねった足首の内側から、なんとも言えない嫌な音が体に響いた。同時に、全身を貫くような激痛が走った。私はその場に倒れこんでしまった。かけ寄って来る仲間。

「ちよつとひねっただけだから、明日には治るよ」

強がって仲間にはそう伝えただけで、心の中は焦っていた。大きなけがだったらどうしよう。ここまで仲間と頑張ってきたのに、迷惑をかけたたくない。最後の試合、出られないのだろうか。肩を貸してくれた仲間の横で、いろいろな思いがぐるぐると頭の中をかけ巡っていた。

次の日にも腫れは引かなかった。前日より痛みは引くどころか、一人では歩けないほど足首は痛くなってきた。病院に行き、診察してもらった。検査の結果は、剥離骨折。全治6週間程度。病院の先生からは、

「今回の大会はあきらめた方がいい。これからの将来にもつながるぞ」

と言われた。その時、頭が真っ白になった。好きでずっと続けてきたバスケットができなくなるなんて、信じられなかった。信じたくなかった。耳では医師の言葉を聞いていたけれど、心が追いつかなかった。「最後の大会の前はどうして」「なんで私なの」「もう、何もかもいやだ」と心の中で叫んだ。

けがをしてからの日々は、これまでの三年間で一番悔しく、つらいものだった。自分だけが仲間置いていかれているような感覚。仲間が練習している体育館の音を聞いたたびに、胸が締めつけられた。大事なポジションを任されていたこともあり、仲間にも申し訳ないとも思った。日常生活の不便さよりも、バスケットができない苦しみや、高まっていくチームの雰囲気から私だけはいき出されたような孤独感でいっぱいになった。

大会前日。顧問からのユニフォーム渡し。これが最大の試練だった。

「試合には出させてあげたかったけど、けがした足では難しい。ユニフォームを2年生に渡すかは、あやみが決めな」

と言われた。出られない私が四番を着るか、それとも後輩に託すのか。今まで私はキャプテンとして四番を任されていた。一生懸命頑張ってきたからもらえた四番である。キャプテンの誇りとしての四番、努力の結晶ともいえる四番のユニフォームを最後に手放したくない。でも、チームが勝つために、ユニフォームを2年生に譲るべきか。今まで一緒に戦ってきた仲間の笑顔が見たい。私の心は大きく揺れた。

「ユニフォーム、二年生に渡します」

震える声で、目に涙を浮かべながら顧問に伝えた。本当はすごく悔しかった。応援しなきゃいけないとわかっているけど、どこかで「自分も出たかった」という未練が消えなかった。しかし、「あやみの分まで頑張る」と仲間が声をかけてくれた。仲間のために、自分でできることをやらなければいけないというキャプテンとしての自覚が、私を突き動かした。私もチームの一員として、仲間と一緒に戦いたい。

そして迎えた本番当日。

私は、チームマネージャーとして、ユニフォームは着ずにベンチに座っていた。体育館の熱気、ブザーの音、大勢の観客や仲間の応援、すべてが夢のように遠く感じた。

試合はけっこう差がついてしまった。でも全員が全力を尽くしていた。コートに出ている五人はもちろん、ベンチで応援している仲間、一年生も、私たちの応援のために来てくれた。コートに立っている仲間がシュートを決めた時のあのベンチや二階席からの盛り上がり、すごい雰囲気、すごく心地よかった。本当は、私もコートに立って、パスを受けて、ドリブルして、リングに向かってシュートを放ちたかった。でもあの歓声をベンチからでも感じ取れて、チームの絆を感じた。「まだ試合は終わっていないよ」「ここから逆転していくよ」私はのどがかわるまで声をかけ続けた。

試合は負けてしまった。でも、私はベンチでチームの力になることを探して、コート外から見て気づいたことを言ったり、一人一人にアドバイスをしたり、いいプレーがあったときは、誰よりも声を出してほめた。悔いは残っていないが、自然と涙があふれてきた。その中にはいろいろな涙があったのだと思う。みんなが私を上位大会まで連れていくという強い意志で最後まで戦い続けてくれたこと、最高の仲間に出会えたこと、でも逆に、この最高の仲間とバスケットをすることが終わったこと、最後に試合に出られなかったことなど。

試合が終わったときのみんなの顔は、疲れ果てていた。本当によく頑張ってくれていたなと実感した。その時、仲間が、「最高のキャプテンだったよ。ありがとう」

と言ってくれた。その言葉にまた涙があふれてきた。コートに立なくても、キャプテンとしてやるべきことがしつかりできた気がした。ちゃんとチームの一員として戦えていた。顧問の先生からは、「あやみがキャプテンだったからここまでまとまることができた。ありがとう。」

と言われた。キャプテンを頑張り続けてよかったと思えた瞬間だった。

中学最後のバスケットの試合。私はけがをしてプレイヤーとして出ることはできなかつたけれど、仲間とともに戦ってきた時間は、これからの人生の中でも、忘れられないものになったと思う。けがからの学び。それは、仲間とともに戦って作り上げた最高の時間を肌で感じることでできたことだ。つらい経験だったが、けがが自分はバスケットが好きなのだを再確認させてくれた。

高校生になって、コートに立ってるかはわからない。けれど、このけがの悔しさは自分の今後のバスケット人生を豊かに彩る原動力となっていくだろう。